
浴衣と花火と夏祭り

海日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浴衣と花火と夏祭り

【Nコード】

N3119W

【作者名】

海日

【あらすじ】

ある夏の終わり、友達が突然浴衣を出してきた。夏祭りに行くう、と言っただが。

とある夏の終わり、夢斗之国は夢斗城の一角。

夕闇の中、縁側に座ってぱたぱたと団扇を動かしていた涼矢は、人の気配を感じて振り向いた。

短い黒髪はつんつんと逆立っており、その顔立ちは精悍できりりとした印象を抱かせる。

その真紅の双眸が、息を切らして角を曲がってきた同い年くらいの少年を捉えた。

「どうした、蒼毅。なんかあつ……ぶつ」

最後まで言い終えることなく、涼矢は言葉を詰まらせる。

理由は、少年——蒼毅が涼矢の顔に向かって何か布の塊の投げつけてきたからだ。

「……浴衣？」

涼矢がそれを広げると、青地に白と銀の糸で波の模様が刺繍された浴衣だった。

広げたはずみで、浴衣よりも濃い、藍に近い青で染められた帯が彼の膝の上に落ちる。

蒼毅が早口で言った。

「そうだ浴衣だ、1人で着られるよな」

「いやそりゃ着られるけどよ、着てどーすんだよ」

蒼毅の細い吊り目がぎつと涼矢を睨む。

ついでに言うと、蒼毅は眉もあまり濃くはない（むしろ薄い）ので迫力には事欠かない。

「今日が何の日か知らないのか若君のくせに」

「え〜と…… はい」

思わず素直に頷いた涼矢に、蒼毅ははあっとこれ見よがしにため息をついた。

「政は祭事。^{まつりごと}自分の国の祭りくらい覚えとかなないと官吏にまた小言を喰らうぞ」

「喰らってるだろ今」

「何だつて？」

「いえ何でもないです」

低くなつた蒼毅の声に思わず敬語で返してしまつあたり、どちらの立場が上か分らない。だが、これでいいのだ。

少なくとも、2人きりのときは。

若君——この国を治める領主の一人息子という立場上、涼矢には常に“威厳”や“高貴さ”が求められる。故に、彼と対等に付き合える“友達”は、ごくごくわずかでしかない。

それだって、お忍びでの話だ。かくいう蒼毅も、表向きにはただの側近でしかない。

対等な“友達”でいられるのは、周囲に官吏たちの目がないときだけだ。

「今日は城下街で夏祭りがあるんだよ。国内の夏祭りは、今年もこれが最後だ」

夏祭り、と聞いて、涼矢の顔が強張る。

「……行かねえぞ、おれあ。あんな人混み」

それだけでなく、領主一族特有のこの真紅の瞳は目立つのだ。祭りの最中で若君とばれて平伏などされては堪らない。

額に布を巻いて隠すにしても、うっとうしいので涼矢は嫌いだった。

「……ああ、それなら平気だ、魔術を借りてきた」

蒼毅が投げて寄越したそれは、黒い丸玉の首飾りだった。

「それつけてる間は丸玉と瞳の色が入れ替わって見えるんだそうだ、分かったら着替えろ」

そう言いつけて、自分の浴衣を小脇に抱えた蒼毅は涼矢の部屋の隣にある自室に入る。

興味深そうに首飾りを眺めながら同じく浴衣を抱えて自室に入つた涼矢は、はたと思い当たって隣の部屋に声をかけた。

ちなみに、2人の部屋を仕切るのは壁ではなく襖だったりするので、会話には全く支障がない。

「ちょっと待て、借りてきたってお前」

「知らん知らん」

蒼毅が親しい魔術師という涼矢には1人しか心当たりがないのだが、その魔術師のもとまで行くとなると馬を飛ばしても1、2刻はかかる。

昼餉の後は2人でしばらく剣術修業に勤しんでいたから、その後馬を飛ばしたのだとするとずいぶん急いで往復したことになる。

知らんとは言うが、最初に姿を見せたとき息を切らしていたのはひよっとして。

——まあ、いいか。

こういうことを問い詰めるのは野暮というものだ。

気持ちを切り替え、涼矢は着替えることにした。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

からころと下駄を鳴らし、青と黒の浴衣を着た２人の少年が祭りの喧騒の中を歩いていく。

左胸に雲に隠れかけた満月を白く染め抜いた黒い浴衣を着た蒼毅は、普段は肩の高さで普通にまとめている長髪を右に寄せてまとめていた。

幼い頃は顔を隠してでも城下の祭りには足を伸ばしていたが、このところはずいぶんとご無沙汰していた。

だから、久方ぶり、それも初めて顔を隠さずに祭りに出向いた涼矢は、どこか浮足立って見える。

涼矢のそういう様子を見ると、多少強引にでも連れ出してよかったなあと思う。

威勢のいい掛け声と共に、豪華で豪快な神輿が通りすぎていくのを見て涼矢が呟いた。

「……城から見下ろすのもいいが、こうして間近で見ると圧巻だなあ……」

蒼毅も頷く。

「そうだな。おれもこうして見るのは初めてだ」

「そりゃそうだろう、お前たいがいおれと一緒にいるじゃねえか。

……やっぱおれ、祭りとか好きだな」

涼矢のその言葉に、蒼毅は目を瞬かせた。

「……なんだ。なら最初から素直に着替えればよかったじゃないか」

「っせーな…… まさか目の色ごまかせるもん持つてると思わなかったんだよ」

照れたようにわしわしと頭を搔いた涼矢は、胸元で揺れる丸玉をつまみ上げた。

「これってたぶん、明日には効力消えてるとかだろ。即席っぽいし」

「……………」

凶星だった。

「……何でそれを」

蒼毅が尋ねると、涼矢はニヤツと笑って言った。

「こんな革紐に丸玉1個通しただけのもんであの魔術師が納得するかよ。」

あいつならもつと紐にこだわり玉の形や数にこだわり、手の込んだもん創りたがる」

確かに。

思わず納得した蒼毅に、涼矢は続けた。

「でも、感謝してるよ。」

即席ってことはそんだけおれのために急いでくれたってことだろ。蒼毅だって馬を飛ばしてくれたわけだし。

……ありがとう」

その言葉に重なるように、どおん、と大音響が大衆の耳を貫く。

藍色の夜空に花弁を散らしながら消える大輪を2人して見上げた後、蒼毅が涼矢を見て言った。

「悪い、花火で聞こえなかった。最後何だった？」

「だから……」

若干気恥ずかしいながらも、涼矢が再び言おうとするとそこにまたどおんという音が重なる。

「……悪い、もう1回」

「……………」

半眼になった涼矢はぱつと身を翻してたつと駆け出した。

「あ、おいこら待てよっ！」

「うるせー、もっと花火よく見えるところ探すぞっ!!」

からからこころこると下駄の音が響く。

「……………ふふっ」

「はははっ」

笑いながら走る2人の少年の姿を、打ち上がる花火が照らしていた。

（後書き）

ツイッターでリクエストを受けて作成した小説です。

以前投稿した「椿野にいる」と登場人物の名前、性格などは同じですが、つながりがあるかどうかは曖昧。

最後までお読み頂きありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3119w/>

浴衣と花火と夏祭り

2011年11月13日19時55分発行